

マンガ 柴野栗山

# 一歩がねてまた一歩

つぎのこ

私の声は届くだろうか。  
——君たちの生きている  
その時代へ……







米粒なんぞ  
ほとんど入つとらん  
ぞお

ふらっ

この夏も  
日が照らなんだ  
しなあ

ましたん

五代高松藩主として  
松平頼恭様が讃岐に  
入国なさった頃も、あい  
かわらずの天災・風水害  
で不作つづきだった。



おいっ

お殿様  
だつ



寛保三(一七四三)年  
頼恭様が領内を巡視  
され民百姓の暮らし  
むきの悪さに胸を  
痛められて、

皆、難儀して  
おるやうだな



—よい  
仕事にもどれ





領内に質素儉約  
を申しわたされて  
藩のたてなおしに  
力を注がれた

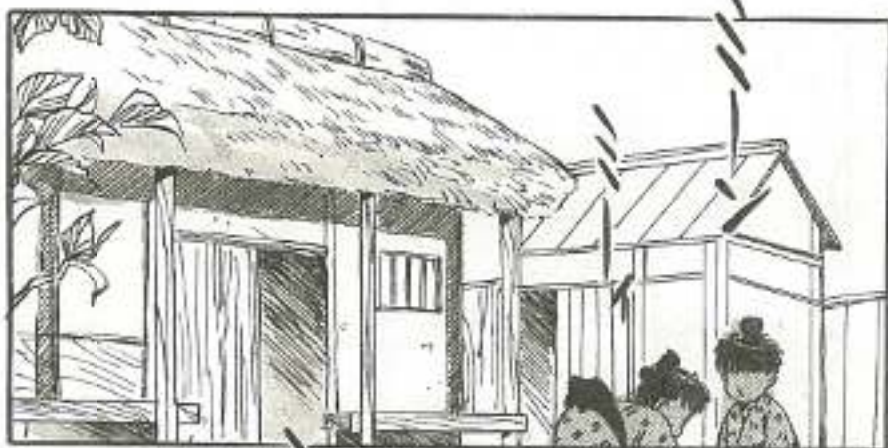


その百姓の子として  
私・小輔(貞毅)と、私  
の兄・彦輔——柴野  
栗山は、この讃岐の  
小さな村に生まれた。

「あわれむべきものは  
百姓なり、おそるべき  
ものは百姓なり」。  
頼恭様はつねに  
苦しい民百姓の生活  
を考えてくださっている。



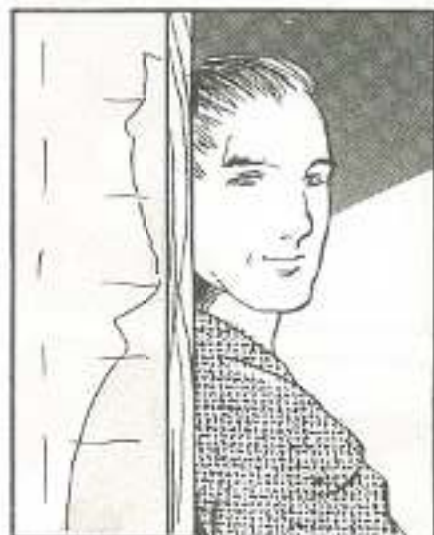
延享二(一七四五)年  
牟礼一夏







兄は幼い頃から頭が良くて、書もうまかった。兄がこの頃に書いた書の筆づかいは、とても子供が書いたとは思われなかった。



いつも働きすぎなんや。ゆつくりしとけばええ。

すみません  
—また

元来身体の丈夫でない母は千蔵を生んでからは床につく日が多い。





うれしそうやね  
彦輔



本家の  
剣岳様の  
家響やろか



ほんまに  
あの子は 学問  
が好きやから

でも  
おまえさま？  
塾の月謝は高い  
のでしょ？



心配いらんよ  
さわ



なんとか  
なるよ



この年、兄は十歳。  
二里も離れた高松・  
香西の後藤芝山先生  
の塾へ通いはじめた。

さつてまいります

ああ  
いつておいで

早朝に家を出て  
帰ってくる頃は  
もう日が暮れて  
いる。





小輔

往復四里の道に  
兄はいやな顔もせず  
休みなく出かけてゆく。  
その兄の明るい顔  
と、はずんだ足どり  
を見るたびに、

香西の塾では  
いったい、どんな  
楽しい事をする  
のだろうと思つて  
あれこれ想像した  
ものだ。

まだちよつと  
はやいけど

せつかく起きだん  
や一手習いでモ  
見てあげよう

はいっ

いつも  
はやいね


おはよう  
彦輔さん

おはよう  
うしろあつこ










しばらく  
遊びに行くと  
らんけど



兄はこの  
五剣山が  
好きだった。



猿達は  
元気やるか

後に、兄が号とした  
「栗山」はこの山の別称、  
八栗山からとったのだ。  
朝夕、長い道のりを歩く  
兄にとってその雄姿は  
何よりのはげまじとなった  
だろう。